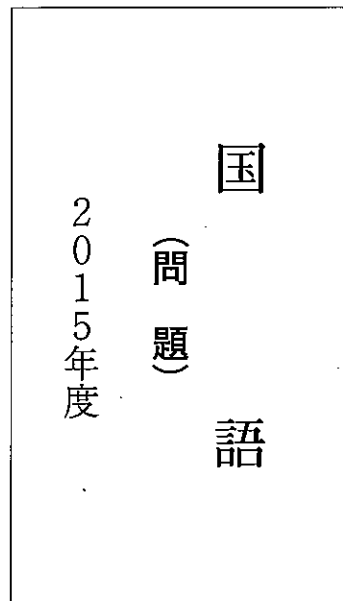




〈2015 H27092024〉

注意事項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は3～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 マーク解答用紙記入上の注意

- (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
- (2) マーク欄にははつきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	● 良い ○ 悪い ○ 悪い
マークを消す時	○ 良い ○ 悪い ○ 悪い

5 記述解答用紙記入上の注意

- (1) 記述解答用紙の所定欄(2カ所)に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
- (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を書いてはならない。
- (3) 受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- (4) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

(例) 3 8 2 5 番

↓

万	千	百	十	一
	3	8	2	5

- 6 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 7 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。終了の指示に従わない場合は、答案のすべてを無効とするので注意すること。
- 8 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 9 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

柳宗悦は、李朝陶磁を終生手元に置き、暮らしの器として愛し続けた。それは、物の在ることの神秘に、自在に入り込むことを可能にさせる親しい通路でもあった。¹ 日常の神秘に入り込むための小さな通路というものが、ありうる。李朝陶磁が、若い柳宗悦にゲンゼンとして教えたものは、そのことだったと言ってもよい。この経験は、文字通りの開眼であって、いったんこのように開かれた眼が、物を観ることに於いて、もはや失敗を演じたりはしない。彼の開眼は、彼の天性と深く結びついて、以後、その眼は迷うことも疊ることもなかった。私たちにそう信じさせるものが、彼の振る舞いと文章にはある。

これは、柳が最晩年になって、病床で書いていることだが、日本人が世界に寄与できるものは、物を直接に観る「眼」だという。たとえば「朝鮮芸術を熱心に勉強し、之を尊敬したのは不思議にも朝鮮人ではなく、実に日本人であった」。朝鮮人が日用品として用い、使い棄てていった器のなかに、物の限らない神秘を観たのは、日本人であった。朝鮮陶磁は、日本において初めて、カンシヨウされ、仰がれるひとつの価値を持つに至ったと言えるだろう。しかし、この価値を与えた、いや、創り出した眼は、西洋の美学的観念からは、かけ離れた働き方をする。その眼は、暮らしのなかでのみ磨かれうるひとつの純粹な直観に依っているのである。足利時代に成立した「茶」は、そうした直観に優れた言葉を、形式や尺度を与えた柳は考える。たとえば茶道に発する「渋い」という美の日常的基準は、日本以外のところにはまったくない。「茶」は、臨済禅と結びついて、その思索力を強めたが、日本に「茶」を生んだ素地は、禅の教義よりはるか以前からあった。それは、つまり稲作民の暮らしの道徳や信仰であったろう。その道徳や信仰は、観念の言葉によって伝えられるのではなく、日常の暮らしの所作によつて伝えられる。その所作に、おのずと求められる美しさが、禅と結んで「茶」という思想を結晶させた。それでもなお、この思想は、観念の言葉を、おぼえてしまひに拒んで成り立とうとするのである。

柳が李朝陶磁に観たものは、高麗時代の爛熟した仏教から、李氏朝鮮時代の簡素な儒教道徳への一種の回帰だった。高麗への弛緩した傾斜から李朝陶磁を救ったものは、儒教によつて一新された人々の暮らしの形だった、若い柳はそう書いていた。けれども、これは仏教より儒教が清々しい、というような話ではない。儒教は、朝鮮の暮らしがその本然を、おのずからそのへの無垢な信仰心を、取り戻すきっかけとなつたに過ぎない。柳は、そう言いたいのだ。

日本の「茶」に対しては、確かに臨済禅がその役割を果たしたと言つてもいい。後年の柳宗悦に対しては、今度は念仏宗がその役割を果たすことになる。そういうことに、実はさしたる意味はないだろう。柳が、李朝陶磁を通して開眼したのは、芸術的な何らかの美に対してでも、何らかの教義が導く真実に対してでもない。彼が開眼したのは、あえて言うなら、暮らしと物と信仰とが、完全にひとつになった命の在り方である。そこで毎日生み出される雑器こそが、美しい。美しいという、ありふれた言葉の意味を、根本から変えるまでに美しいのである。

朝鮮人は、こうした器が美しいとは、少しも感じずに、これらを生産してきたもののように思われる。このようなことは、李朝に限らない。たとえば、高麗の焼き物についても、まったく同じように言える。日本の初期茶人が、朝鮮ではまったくの雑器に過ぎなかった高麗の飯茶碗に見出した性質は、ほとんど茶の核心を成すに到つたと言え言える。それらは、やがて茶人のあいだで「大名物」と呼び慣わされるようになり、今では国が博物館で管理する途方もない宝物になったというわけである。そんなところに陳列され、見物客にじろじろと眺めまわされても、その茶碗は依然として美しいのだろうか。これは、なかなか難しい問題である。

物の美しさは、物だけが持っているのではない。それを観る人間の眼とともに、ある瞬間に物から生まれてくる。この事実が、いかにも不思議であり、神秘なものだが、また極めて具体的に、暮らしのなかで起こってくる事実でもある。器からその美しさを誕生させる、ある具体的な日常の経験が、言い換えると、その器に深く心を通わせるはつきりとした暮らしがなければ、「大名物」も何もない。

李朝陶磁の発見は、柳の思想、信条の全体を貫く太い線となつた。この発見は、文明というものに向けられる眼の一大転換を、すべての人間に求める基点となつた、そう言つても過言ではない。高麗茶碗に対する同じ性質の発見が、初期茶人たちの間では、起こつていたに違いない。彼らが茶器として取り上げた高麗茶碗は、高麗時代の朝鮮で無数に作られ、使い捨てられていた雑器にほかならなかつたが、これが「井戸」などと呼ばれて、大名、將軍の有り難がる神品になる。日本での茶道の成立は、初期茶人が茶器として取り上げた高麗時代の飯茶碗と切り離しては、なかつたかもしれない。

高麗茶碗に神品の地位と法外の値を与えたのは、茶道だが、与えた時には、すでに「茶」の病ひ⁴が始まっている。柳は、そう見ている。高麗の茶碗を「ちかに見た」室町期の茶人と、「井戸」などと呼ばれる高麗の神品を、商人の資本と武家の政治権力とを利用して取り扱った桃山時代以降の茶人との間には、「眼」において天地の開きがある。そういうわけで、後に茶道の完成者とも言われる利休の眼を、柳は取るに足りないものと見た。

柳によれば、利休の眼が、茶器に取り上げたとされる朝鮮物のほとんどは、すでに初期茶人たちによつて、充分に発見されている。反対に、利休の指導によつて作られたとされる楽茶碗の多くは、わざとらしい歪みを付けた、愚かな代物に過ぎない。楽茶碗は、始めから茶器として、あるいは美術品、芸術品として作り設けられた高価な商品である。それには必ず銘があり、金印があつたりする。実に馬鹿馬鹿しいことではないか。利休は、茶の完成者と言うよりは、明らかにその墮落の歴史的な出発点にいた人だと、考えるべきである。柳はそう断言する。

楽が手本とした高麗茶碗には、もちろん銘などあるはずがない。毎日の生活に追われる工人たちが、すばやい手作業で大量に作つた日常の雑器に、作り手個人の痕跡などあるはずがないのである。出来を省みる暇もなく、急ぎ通して作られたが故に、そこには歪みがあり、欠けがあり、引つ附きや、掻き傷や、疵の痕、無造作な釉の流れがある。これらはみな、少しも意図さ

れずに、やむをえず、むしろ、作り手の意に反して生まれたものであった。初期茶人たちは、そこに限らない美しさや変化とを見たのである。自然の奥の奥から、洗われたように姿を見せてくる自然という存在の粋を見たのだった。そもそも「茶」とは、そのようにしてへ在るものゝの粋に、暮らしの所作を合致させて生きる努力でなくて何だったであろうか。

* 初期茶人による高麗茶碗の発見は、まさにひとつの驚異であり、奇蹟と言ふに値するものだった。けれども、この驚異は、茶道と呼ばれる芸事の制度、雰囲気の中からは、維持することの極めて難しいものだったであろう。「井戸」に驚いた日本の茶人は、まさに見ることにそのものによって、茶器としての「井戸」を作ったのである。それは、雑器だけを作り続けた朝鮮の工人たちには、為し得ないことだった、そう言ってもよい。工人たちは、「井戸」をめぐる茶人たちの感嘆、スウハイ、大仰な取り扱いおりを、さぞかし笑うだろう。ここで朝鮮の工人たちに笑われるのは、極めて大切なことだと柳は思う。そのことが、「茶」を健全な暮らしの領域に引き留めるのだと。「井戸」を作りだす根本の条件は、そこにある。生計に追われる工人たちが、休む間もなく作りだし、同じように手仕事、野良仕事に没頭する庶民たちが無雑作に使い果たしていく、そうした暮らしが「井戸」を生む条件である。

初期茶人たちが「井戸」という茶碗を掴み出したのは、そうした暮らしの間の底にある信仰心からだった。彼らの「茶」は、その信仰心から直接に流れ出て、無駄のない所作の型へと凝縮されたものだった。雑器を茶器に変容させたものは、生まれてきたこの型だろう。また、ついにこの型を生み出すに至った、純化された暮らしのなかの信仰心だろう。そこから、はつきりと観えてきた雑器の新しい、驚くべき姿があった。雑器という物が在ることの言わば最も深い次元が、その時、突如として開かれたのである。

したがって、柳が言う a の発生は、 b という c の発見とほとんど同じであった。本居宣長の言葉を借りて言えば、茶道とは、まさしく「物にゆく道」であつたと言える。この「道」は、教義を持った宗教や美学思想などを、本来必要とはしていない。それどころか、「物にゆく道」を濁らせ、観えなくさせるのは、そうしたものがもたらす観念なのである。

桃山時代に、茶人という一種の新型文化人が、「侘び」だの「寂び」だの「渋さ」だのという美的判断の尺度を作り出したことには、功罪まじりたる相半ばするものと、柳は考える。このような尺度の創造によって、高麗の雑器は、 x の最も深い次元で発見し直された。これは、日本の茶人に帰せられてよい功績である。けれども、彼らが自分の作為で、あるいは自分の指導力で、名物ともなり得る茶器を日本で作り出した時には、たいていの場合、無残に失敗している。

その理由は、明らかだろう。工人が造り出したものは、茶人の観察によって分析できる。また、その分析は、どこまでも微細な点に及ぶことができる。しかし、分析されたものの総和や合成が、元の創造へと遡る路は決してないのである。初期茶人が物を「ぢかに見る」眼は、それ自体がひとつの創造をもたらし、物を「ぢかに見る」眼は、いろいろな見処を分析し、観察する眼とは、まったく違う。が、「ぢかに見る」眼から、観察する眼へのこの移行は、あまりに自然に行なわれ、たいていの人は、この移行に気付かない。

器を「ぢかに見る」ことは、それを作ることが一息でなされる連続する行為であつたように、ひとつの不可分な行為として成り立っていた。その時、眼は、作る行為を追いかけるというよりは、作られた物のなかに入り込んで、その物が生まれてくるのと同じ形成を、その物の内側から一挙に生きたのだ。物は、その行為によって、もう一度生まれ直すとも言える。新しい命を吹き込まれて、蘇えってくる。それは、まさしく雑器が茶器へと生まれ変わる瞬間でもあつただろう。そういう瞬間を持つことのできる雑器が、高麗にあり、李朝にあつた。

(前田英樹「民俗と民藝」による)

問一 傍線部1「日常の神秘に入り込むための小さな通路」とあるが、その例として適当でないものを次の中から一つ選び、

その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 美しさが物から生まれてくる瞬間
- ロ 手元に置いて使う李朝陶磁
- ハ 毎日生み出される雑器
- ニ 李氏朝鮮時代の簡素な儒教

問二 傍線部2「物を直接に観る「眼」とあるが、その眼の例として適当でないものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 暮らしのなかでのみ磨かれうる純粋な直観に依っている眼
- ロ 朝鮮陶磁に仰ぐにあたいする価値を見出す眼
- ハ 朝鮮陶磁の西洋美学的価値を創り出した眼
- ニ 物の限らない神秘を観る眼

問三 傍線部3「美しいという、ありふれた言葉の意味を、根本から変えるまでに美しい」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ ある具体的な日常の経験がないところに不意に誕生するものが美だということ
ロ 美しいとは少しも感じずに生産することによってこそ美が生まれるということ
ハ それを観る人間の眼とともに、ある瞬間に物から生まれてくるものが美だということ
ニ 博物館に陳列されて見物客に眺めまわされることにも耐えるものこそが美しいということ

問四 傍線部4「茶」の病ひ」とあるが、その例として最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ「井戸」
ロ 大名物
ハ 楽茶碗
ニ 李朝陶磁

問五 空欄 a c に入る語句の組み合わせとして、最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- | | | | | | |
|-----|----|---|----|---|----|
| イ a | 茶道 | b | 茶器 | c | 物 |
| ロ a | 茶道 | b | 物 | c | 茶器 |
| ハ a | 茶器 | b | 茶道 | c | 物 |
| ニ a | 茶器 | b | 物 | c | 茶道 |
| ホ a | 物 | b | 茶道 | c | 茶器 |
| ヘ a | 物 | b | 茶器 | c | 茶道 |

問六 空欄 X に入る最も適当な六字のひとつづきの語句を、本文中の*印をつけた段落よりもあとの部分から抜き出して記せ。

問七 次の中から本文の内容と合致しないものを一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 稲作民の暮らしの道徳や信仰は暮らしの所作によって伝えられ、その所作の美と禪とが「茶」という思想を生んだ。
ロ 工人が造り出したものは茶人の観察によって分析できるので、「ちかに見える」ことで新しい命を吹き込むことができる。
ハ 初期茶人による高麗茶碗の発見は奇蹟と言うに値するものだったが、茶人の作為で名物を作ろうとした試みは失敗した。

ニ 朝鮮人が使い棄てた器に価値を与えたのは日本人であり、その「渋い」という美の基準は日本独自のものだ。

ホ 仏教より儒教が清々しいわけではないが、儒教によって暮らしの形を変えた人々によって李朝陶磁は墮落を免れた。

問八 傍線部A、Cのカタカナの部分の漢字に直せ（漢字は楷書で丁寧を書くこと）。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

村は今、どのようにして「村」でありうるか。ある年の冬、豪雪地帯として名高い新潟の山村への「雪下ろしツアー」が企画され、予想をはるかに上回る応募があつて大盛況だったというニュースに接して驚いた。しかも、その企画は、過疎に悩む村当局の、苦肉の策であつたという。村が、そのように考えたというのは、ある意味でよくわかる。それによつて、過疎で沈滞した村を活性化させようとするのは、藁にもすがる思いであつたに違いない。そして、ひとまず、その目論見は成功したといえるだろう。日本海側の人々によつて、雪がいかなるものであるかということが、ツアーに参加した人たちに、ほんの少しだけでも体験してもらふことができたのだから。私が気になったことは、そのツアーに応募した人々のことである。彼らは、どんな思いでツアーに応募し、どのような気持ちで電車に乗り、現地で雪を下ろしながら何を考えていたのだろうか。彼らは、自分らを都会の人間だと意識していたのだろうか。あるいは、雪がめずらしい南の地方から東京に住み着いた人たちだったのだろうか。一泊か二泊の旅が、彼らの多くの心の奥に眠っているに違いない、原郷としての村落への思いを、目覚めさせることがあつたであらうか。

甲

夏、離村して朽ち果てそうな空き家が別荘がわりに利用され、こちらにも、都会の中流たちに喜ばれているとも聞く。そんな家で夏を過ごして、恐ろしいことが起きないのだろうか。人が住まなくなつて荒れ果てた家の、煤にまみれた屋根裏や奥まった部屋から、もろもろのモノたちが夜中になると蠢き出してくるという心配はないのだろうか。プレハブやモルタルの箱の、消費物としての家に住んで、化学合成された香水を振りまきながら、家の歴史やその家毎の匂いを消すことだけに精をだす人々によつて、家の歴史を刻んでいたはずの空き家は単なる箱にしか過ぎなくて、家の神や、屋敷神や、座敷童子や、その家で死んでいった先祖たちの魂など、もはや昔話の世界でしかないのだろうか。もちろん、私にとつても、それらはほとんど観念の世界のものでしかない。でありながら、私は空き家になつた古い家で、夜は過ごせない。

村が、都市に住む者たちによつて「美しき里」になり、心の故郷になつたとき、雪下ろしや空き家がレジャーの対象になつてゆくのに違いない。間違ひなく、そうした意識が生じてくるのは、村落が壊滅の危機に瀕した現代の現象だといつてよいだろう。というより、今、村落は崩壊したといつてもよい。いや、村はいつの時代にも、不安定で危機に瀕して存在したのだ。そしてそのとき、村を棄てて都市に流れてゆく者たちによつて、村は決して「美しき故郷」などではありえない。懐かしさと憎しみが渾然とした原郷でしかないだろう。だから、都市はいつも、恐れと憧れの目で村を見ていたのだし、村落も、都市を恐れと憧れの異郷として対峙し、その往復運動によつて都市も村落も活性化され続けていた。

ところが、近代が進むにつれて、両者の関係は不均衡に、いびつになつていく。そして、いつのまにやら近代の村落は、都市に支えられてしか存在しえない共同体に成り果てたのである。

その近代における、都市と村とを結ぶ象徴的な存在が、くまなく張り廻らされた鉄路だった。上り列車に乗つて都市に出てきた人々によつて、都市は繁栄した。そうであることによつて逆に、都市は、村落にとつての異郷となり、憧れの世界になつてゆく。人々を迎え入れ、金や物を還流させる経済力をもつた都市によつて、村落は活性化され、人々は都市への憧れと恐れをいよいよ増幅させていったのである。しかし、その異郷は、村落を活性化させるための **I** として、共同体そのものが生み出した前近代の異郷とは違い、強引に収奪しつづける **I** であつた。

都市とは、あくまでも近代国家の側のものであり、村落はそこに引きずり込まれてしか存在しえない、受動的な立場に追いこまれていった。それが近代という国家だということである。だから、村落は都市に限りなく吸い取られ、都市に包みこまれてしか存在しえないものへと、変貌を余儀なくせられた。

近代とは、村落の崩壊を代償として肥大化した時代だといつてよい。鉄道は、村落から都市へと人びとを運ぶ人買い列車という役割を担っていた。

今、ローカル赤字線の鉄路が剥ぎとられている。それは、近代のひとつの終焉を意味しているだろう。都市にとつて（あるいは国家にとつて）、村落はもう収奪の対象としての価値をなくしてしまつたのだ。だから、運賃収入だけを前面に押し立てた経済効率論が幅をきかすことができるのである。

かろうじて残る村落は鉄道の廃止でどうなるか。その結果は目に見えている。過疎化に拍車をかけて、完全に村落の息の根をとめてしまふだろう。「雪下ろしツアー」を企画する村落のしたたかさもつてしても、村をもちこたえさせることはできなくなるかもしれない。近代の、都市に吸引されてしか存立しえない村作りに加担した鉄道は、近代の村落の側に立つていえば、希望の星でもあつたのだ。内部維持装置としての異郷の代替物となつた都市は、村落にとつて恐ろしき世界であるとともに、村落に富をもたらしてくれる豊饒の地として憧れの世界でもあつたからである。その異郷と村とを直接繋いでいるのが鉄道だった。だから、鉄道の先に異郷があるという幻想が、近代の村落に生きることの根拠にもなつたのである。それを剥ぎとってしまうという行為は、村落を潰してしまうこと以外にはほとんど何の意味も持たない。

いくらアスファルトで固めてみても、道路は、村落と異郷を繋ぐものにはならない。村と隣の村、そこと隣町とを繋ぐのが道路で、それは、どこまで迫つていっても異郷に行きつくものではない。高速道路も鉄道の代わりをすることはできない。それは新幹線と同じで、東京と地方の都市とを繋ぐだけで、小さな町や村は、はじめから無視されてしまつていく。

もう、ほとんど収奪するものになつてしまつた村落は、今、完全に切つて捨てられる。都市は、村落を相手どることをとうの昔にやめてしまい、内部の弱き者に目を向けはじめ、そこに彼らの活性源を求めている。あるいは、地方の時代と称し

て、大都市は周辺や地方の小都市を相手にしてゆく。だから、無視された村落は、雪下ろしツアーや空き家別荘など、都市に住む人たちのストレスをほんの一瞬だけでも忘れさせてくれるレジャー・ランドでありさえすればよいのである。そこは、積み重ねられた歴史も恐ろしきものも人々の

* 神話的にいえば、昔のある出来ごとによって、渾沌の大地は、

Ⅱ も感じる必要のないところだ。Ⅲ に変貌する。そのとき、村落にのつての昔の出来ごととは、始源から続く今を保証するものとなるのである。神話的に昔に生じた始源の出来ごとによって獲得された楽しき村は、本来的にいえば、村落の今と未来の豊かさを保証するものであることにおいて、村落の起源としての昔となる。その神話に守られて人々の生活は安定したものとして持続する。外からみてその生活が貧しくとも苦しくとも、それが始源の出来ごとに保証されてある限り、村落にとつては、豊かで楽しいものとして今も未来も続くのである。

和人(シヤモ)の侵略が本格化する以前、北海道(これは近代国家の側から名付けられた呼び名でしかないのだが)の大地に住むアイヌの飽和人口は、二万八千から三万二千人程度で、その数は江戸時代を通してあまり変わることがなかったというつまり、あの広さを持ちながら、狩猟採集民であるアイヌがぎりぎりの生活を保つことのできる人口がその程度だったということをもみても、我々の側からいえば、きわめて貧しい生活であつただろうということは、容易に想像することができる。でありながら、おそらくその生活を、かれらは、貧しく苦しいと感じていたわけではないはずだ。

熊を狩り、鮭を取り、ウバユリを採集する日常は、それらが、彼らに与えられることになった始源の昔の出来ごととともに、彼らの今と未来から離れてゆくことはない。不安定でありながら、安定した生活は、そのようにして、彼らのものであり続けるし、そうあり続けなくてはならないものであつた。

そして、アイヌだけがそのようにあつたのではない。前近代の村落は、どこでも、いつの時代にもそのようにしてあつた。そのようにしてしか村落はありえなかつたのだと言つたほうがよいかもしれない。村落の昔が、楽しく豊かであつたなどと考えないほうがよいし、そこに住む人たちが心優しい善人ばかりだつたなどと、けつして考えるべきではない。同様に、村はいつも飢饉に襲われ続け、人の心は余裕もなく荒れずさんでいたというふうにも考えるべきではない。豊かな時も飢饉の時もあつて、優しい人も意地悪な人もいて、それが村落であつた。ただ、村落が真に村落であつたとき、その生活は、いつも、

Ⅳ に根拠づけられてあつたということが大事なのである。

(三浦佑之『村落伝承論』による)

問九 次の四つの文を適当に並び替えて、本文中の空欄

甲

に入れるとしたら、三番目に来るものはどれか。最も適当なもの

ものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ あまりにも傲慢なと思える、都市に住む人々のレジャーとしての雪下ろしのニュースにあき果てるとともに、それを企画したのが豪雪の村の村人であるという点で、村落のしたたかさも同時に感じ取ることができた。

ロ そんな一時的な企画で村が活性化するなんてとても考えられないということは、だれでもわかつていることなのだから。

ハ しかし、それによって村落が発展してゆくことは決して起こりそうもない。

二 たぶん、そのしたたかさがあるかぎり、その村が減り去つてしまうことはないだろう。

問十 傍線部A「村落は崩壊した」の説明として最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 憧憬の対象となるべき村落が一切消滅したということ。

ロ 村落を時代の中で正しく位置づける現代的な視点を人々が持てなくなったということ。

ハ 都市の人々が期待できるような、昔からの村落のイメージを保持できなくなったということ。

二 歴史に根ざした村落というあり方そのものが存在しなくなったということ。

問十一 空欄

Ⅰ

Ⅲ

に入る最も適当な言葉を、それぞれ次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

Ⅰ イ 外部

ロ 象徴

ハ 装置

二 役割

Ⅱ イ 主知への憧れ

ロ 生活する匂い

ハ 伝統尊重のあやうさ

二 理想の息吹

Ⅲ イ 美しき故郷

ロ 幻想の異郷

ハ 秩序ある世界

二 豊饒な農地

問十二 傍線部B「村落の崩壊を代償として肥大化した時代」の説明として最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

入欄にマークせよ。

イ いくつもの村落を全く新たな都市へと一気に変貌させた時代

ロ 多くの村落を一体化させて巨大な空間を創り出す時代

二 村落と都会との新しい関係を通して近代のあり方を展開させた時代

ハ 都市だけが人間の社会であるかのように考えられている時代

問十三 傍線部C「貧しく苦しいと感じていたわけではない」の理由の説明として、最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 村落の起源から与えられ今に続く限り、どのように苦しくても豊かに保証された生活であり続けたはずであるから。
ロ 貧しいとか苦しいという尺度がもともと存在せず、人々は現実の日常にせいっぱい力を注いでいるから。
ハ 貧しく苦しいという感情的な次元をこえて、歴史の真実を示すものにおのずからなっているから。
ニ 歴史の必然をそのものとして受け入れることで、貧しく苦しい現実を相対化する姿勢をおのずと身につけているから。

問十四 空欄 Ⅳ に入る最も適当な四字のひとつづきの語句を、本文中の*印をつけた段落よりもあとの部分から抜き出して記せ。

問十五 次の中から本文の内容と合致しないものを二つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ アイヌのような民族に伝えられた伝承は、昔の世界のそのままの姿をうかがうにはいいが、近代と前近代の狭間に置かれた人々の実態を考えるのに必ずしもふさわしい文献とはいえない。

ロ 今に繋がることのない昔を願望として思い描くことしかできないところに、現代人の置かれた立場が端的に示されている。

ハ 共同体という考え方は、近代という時代の産物であり、村落と都会のダイナミックな歴史的変貌を見直すには、やや無理な概念となっている。

ニ 近代国家に凌辱された形の人々にとって、楽しく美しい住みかは過去のものであり、今の生活を根拠づける神話的な昔ではなくなっている。

ホ 現在都会に住む人々は、村落というものの持つ運命の内実を考えることによって、普段は意識されることのない自身自身の存在を確認することができる。

(三) 次の甲・乙を読んで、あとの問いに答えよ。

甲〔左は、平安末期の貴族、藤原実家の家集（個人歌集）の一部である。なお、途中に省略した部分、手直しをした箇所がある。〕
兵衛殿の集を、あながちに「見む」と言へば、「さらば」などはありて、なほ程の経れば、尋ねにやるとて。詞は無くて、
頃きはは A なり。
さくら花 うかぶ水際の しら波は たちて日ひ数を 経たるとぞ見る（和歌Ⅰ）
かへりごと。
さくら花 うかぶ流れは しるたへに 水に消えせず よする波かな（和歌Ⅱ）
かくて、草子は加へられたり。

B「宮内の少輔伊行といひし者、手書くべきありさまを草子に書いて、それをば夜の鶴と名付けて、女をんななる者に取らせ置き
て身まかりにき」と大宮の加賀が語りしかば、尋ね取りて見て、程の経しを、乞ふとて。これも春のことなり。

加賀

出でて見よ まれに咲き出づる 花の色の たち隠れつつ へだて行くめる（和歌Ⅲ）
沓くつ冠かんといふことにて、たはぶれたりけるなめり。

花のころ、俊恵法師がもとより。

春の花 惜しみてはまた つつみかね 手ごとさのみ はては折らめや（和歌Ⅳ）
かへりごと。

今はただ 咲く花ぞ待つ 寝こそ寝ね 聞くに惜しみ 手も触れで見む（和歌Ⅴ）
かく言ひたりしかば、すなはち俊恵法師出でて来て、ものなど言ふついでに、「故木工こもくの頭の歌に、「はかなしな 小野おのの
小山田おやまだ 作りかね 手をだにも君 はては触れずや」（和歌Ⅵ）、かく言ひたりければ、かへしをばせて、故東宮とうきゅうの大夫、
使につきて、「いざ、さは、花見に」とありしこそ、昔の広幡ひろはたの御息所の、薫かほき物もの奉ほうられたりけむ心地して、をかしう
はべりしとこそ、常に語りはべりしか。家の集にも書き留めたり」など語るは、かへしはすまじきと思ひけるなめり。
などてか、必ず同じ様ならむや。

乙〔左は、甲に言及される広幡の御息所の逸話を述べた、源俊頼著の歌学書「俊頼髓脳」中の一節である。〕
「あはせ薫かほき物ものすこし」といへる事を据えたる歌。

あふさかも はては行ききの 関もあらず たづねてこばこ きなばかへさじ（和歌Ⅶ）
これは、仁和の帝の、方々に奉らせ給ひたりけるに、みな心も得ず、かへしどもを奉らせ給ひたりけるに、広幡の御息所と
申しける人の、御かへしは無く、薫かほき物を奉らせたりければ、心あることにぞ思しめしたりけると語り伝へたる。

注 兵衛殿の集：当時、著名な女房歌人であった、上西門院兵衛の個人歌集のこと。

沓冠：各句の頭（冠）と末尾（沓）をたどると、そこに語句や文が隠されている和歌。たどる順序にはいくつか種類
がある。

故木工の頭：俊恵の父、源俊頼のこと。

故東宮の大夫：藤原公実のこと。藤原実家の曾祖父にあたる。

問十六 空欄 A には、陰暦で示せばどのような時節を表す言葉が入るのが最も適当か。次の中から選び、その記号の記
入欄にマークせよ。

イ 正月中旬 ロ 二月上旬 ハ 三月下旬 ニ 四月中旬 ホ 五月上旬

問十七 和歌Ⅰ・Ⅱの句の頭を順にたどると、それぞれ「草子くさし給たべ」（和歌Ⅰ）、「草子くさし見みよ」（和歌Ⅱ）のメッセージを読み取
ることが出来る。このような和歌の技法は何と呼ばれるか。次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 挙句 ロ 折句 ハ 発句 ニ 麗句 ホ 連句

問十八 傍線部 B「宮内の少輔伊行」は、現存する最古の「源氏物語」注釈書である「源氏釈」を著した人物として知られる
が、その女の一人は、高倉天皇の中宮に仕え、平家の公達の一人と恋愛し、後には後鳥羽天皇にも仕えた女房歌人であつ
た。この歌人として著名な伊行の女の名を次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 阿仏尼 ロ 和泉式部 ハ 右京大夫 ニ 讃岐典侍 ホ 六条御息所

問十九 傍線部Cに見出される助動詞と同じ助動詞を含むものを、次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ あやしうこそもの狂ほしけれ
ロ 男もすなる日記といふもの
ハ 我もしかなみだを添ふる
ニ たまのひかりも添はざらん
ホ 夢と知りせば覚めざらましを

問二十 和歌Ⅲ・Ⅳはすべて沓冠であり、ⅤとⅥには全く同一の文が隠されている。それは、Ⅲ・Ⅴ・Ⅶとは異なつて、第一句の句頭↓句末↓第二句の句頭↓句末…とたどっていく形式になっている。Ⅳ・Ⅵに隠されている文を、すべて平仮名で、かつ必要な箇所正しく濁点を付けて記せ。なお、文末に句点を付ける必要は無い。

問二十一 傍線部Dの動詞の主語は誰か。次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 藤原実家 ロ 俊恵法師 ハ 故木工の頭 ニ 故東宮の大夫 ホ 広幡の御息所

問二十二 傍線部E・Fの意味として最も適当なものを、それぞれ次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- E イ 花見の返礼をする必要はないと当然私は判断したのである。
ロ 返信すること自体失礼だと故東宮の大夫は思ったらしい。
ハ 薫き物を奉るはずはないと故木工の頭は考えたという。
ニ 和歌を返すべきではないと俊恵は思っていたようだ。
F イ 来るのは構わない。しかし、来ても何もあげられないよ。
ロ やつて来るなら来なさい。もし来たらあなたを帰さないよ。
ハ 自分から訪ねてくれることを望む。私の方からは行けないよ。
ニ 問い合わせてくれることは嬉しい。けれども返事はできないよ。

問二十三 次の中から甲または乙の内容と合致するものを一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 兵衛は実家の申し出を受けながら、わざとじらせてその気を引いたのであった。
ロ 伊行が女のために著し残したという書道の本を、実家はぜひ読みたいと思った。
ハ 俊恵の誘いに実家は、残念ながら桜を見に出かけるのは難しい、と返事をした。
ニ 俊恵の父俊頼と実家の曾祖父公実は相談して、子孫のために歌の手本を残した。
ホ 広幡の御息所は、香の調合の方法を知っていたため、帝の愛情を一身に受けた。

(四) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ(返り点・送り仮名を省いた箇所がある)。

仕宦^{シケン}而至^ニ将相^{シヤウシヤウ}富貴^{フキ}而歸^ル故郷^{コキョウ}。此人情之所榮^{ニシテトスル}而今昔之所同也^{シキ}。大丞相衛國公^ハ世有^ニ令德^{リテ}為^ニ時名卿^リ。自公少時^ニ已擢^ニ高才^ニ登^ル顯仕^ニ。海內之士聞^ニ下風^ニ而望^ニ余光者^ハ蓋亦^タ有^リ年矣。所謂將相^{ニシテ}而富貴^{ナルハ}皆公所宜^ニ素^ニ有^ニ非^{ザル}如^{キニ}下窮^ニ。駭^ガ而誇^コ耀^ニ之^ヲ也。然則^{ラバ}高牙大纛^{ダイ}不^レ足^ヲ為^{スニ}公榮^ト。桓圭衰裳^{コンシヤウモ}聲詩^{セイシ}以^テ耀^{カシテ}後世^ニ而垂^ル無窮^{ノミ}。此公之志^{ニシテ}而士亦^モ以^テ此望^ム於公也。

A 只誇一時、而榮一鄉哉。

(歐陽脩「相州昼錦堂記」による)

注 高科：科擧に上位で合格すること。

窮阨：貧しくて生活に困ること。

高牙大纛：高位の人の旗飾り。

桓圭衰裳：高位の人の装束。

社稷：国家。

問二十四 傍線部1「聞下風而望余光者」の意味として最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 衛國公のあまりにも謙虚な様子を聞いて、その人物を頼りないと思う者
ロ 衛國公の輝かしい業績を聞いて、その名譽が後世に伝わることを祈る者
ハ 衛國公の子孫の榮達を聞いて、祖先が残した財産や高い地位等を羨む者
ニ 衛國公の臣下の話を聞いて、自分も同じく恩恵にあずかりたいと願う者
ホ 衛國公の人格が立派だとの評判を聞いて、そのあふれる徳を敬慕する者
ヘ 衛國公の悪い噂を聞いて、衛國公からなるべく遠ざかろうとする者

問二十五 次の熟語の中の「素」で、傍線部2の「素」と同じ意味で用いられているものを一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 素手 ロ 素衣 ハ 素人 ニ 素行 ホ 素説 ヘ 素朴

問二十六 空欄 A に入る最も適当な一字を次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 将 ロ 当 ハ 必 ニ 敢 ホ 竟 ヘ 豈

問二十七 この文章の主旨に合致するものを次の中から一つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 衛國公が低い地位から意外な出世を果たしたことに對して、当時の人びとは皆とても驚いた。
ロ 高位高官に登り豊かな財を得て故郷に帰ることが、衛國公の心から名譽とすることであった。
ハ 衛國公はどれほど高い榮譽や地位があったところで、それを価値あるものとみなさなかつた。
ニ 生前に行った事績を金石に刻み詩に詠じたとしても、その名を永遠に残していくのは難しい。
ホ 衛國公は持ち前の人徳によって天下に名を馳せ、窮状に苦しむ人びとからも大いに慕われた。
ヘ 若くして科擧に合格し順調に官途を得た衛國公も、人びとに惜しまれつつ志半ばに引退した。

(以下 余白)